

中山間地における白ねぎの8月上旬収穫作型を確立

野菜・茶業研究所

周年安定出荷は産地強化の観点より重要であるが、8月から9月にかけて県内の出荷量は減少しており、標高500m前後の中山間地において8月上旬より安定出荷できる栽培技術・作型が必要となる。そこで、中山間地で白ねぎを8月上旬から安定出荷するために、適品種の選定や定植時期、播種粒数について検討したので紹介する。

【普及したい技術のポイント】

- ①品種「ホワイトスター」を用い、チェーンポットCP-303で50～60日育苗した苗(葉鞘径2mm程度)を3月上旬に定植する(標高500m前後まで)。
- ②播種粒数は基本的には3粒播きを勧めるが、2L・Lサイズ収量を重視するなら2粒播きとする。
- ③定植後低温(概ね平均気温が3℃程度以下)が続くことが予測される場合は、パスライトで1ヶ月程度べたがけ被覆すると活着不良による苗立ち数の減少を軽減できる。

【品種】

「ホワイトスター」が「吉蔵」に比べ葉鞘の肥大性、収量性に優れる(図1)。

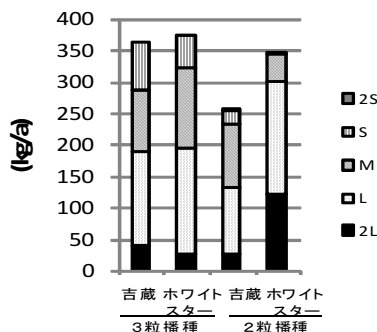


図1 3月上旬定植の品種と階級別収量

注1) 調査日は2008年8月4, 5, 6日

【定植時期と播種粒数】

3月中旬までに定植すると、Mサイズ以上の収量が300kg/a以上得られるが、3月上旬定植は3月中旬定植よりも生育が優れる(図2)。

8月上旬収穫のためには、3月上旬定植がよい。

総収量は定植時の苗立ち数が多い3粒播種が2粒播種より多いが、「ホワイトスター」では、2L・Lサイズ収量は2粒播種の方が多(図2)。

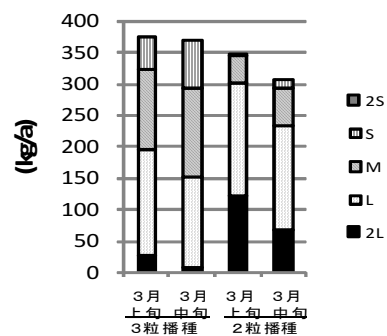


図2 定植時期、播種粒数と階級別収量

注1) 調査日は2008年8月4, 5, 6日

注2) 品種は「ホワイトスター」

【被覆の効果】

3月上旬定植では、低温の厳しい年には活着不良による苗立ち数の減少が見られるが、定植後1ヶ月程度パスライト等でべたがけ被覆することによって軽減できる(表1)。

表1 3月上旬定植の被覆による被害軽減

被覆の有無	定植時	苗立ち数(本/m)		
		4/4	5/7	収穫時
有	53.5	47.5	36.5	35.5
無	52.5	14.5	11.5	9.5

注1) 定植は2007年3月6日、収穫は2007年8月1日

注2) 品種は「吉蔵」

注3) 被覆有は定植後1ヶ月間パスライトべたがけ